

子どもと共に追究する教育実践を目指して —豊かな追究を引き出す単元構想と追究分析—

小学校6年生社会科「ふるさとの時を紡ぐ ～縄文から古墳へ 伊保の起源を探る～」の実践を事例に

大浦 一晃

豊田市立伊保小学校

1 はじめに

児童生徒が自ら課題意識をもち、主体的に追究する姿を引き出す授業実践をしたい。

附属岡崎中学校の研究協力者として、問題解決学習を中心とする附属校の授業開発や、そこから引き出される、追究し深めていく子どもの姿を学ばせていただいている。

本稿では、公立校の実践報告として、附属校の実践を公立校に活用する授業実践の手立ての一例を「単元構想」と「追究分析」の視点に特筆して述べたい。

2 単元構想の実践

(1) 追究意欲を高める教材の発掘

附属校の先生達に教材を選ぶ過程について話を聞くと、教材の捉え方が見えてきた。その共通点は「その教材が、児童生徒が主体的に課題解決したいと感じるものであるか。」だと、個人的に考えている。

本実践は、歴史学習の出会いとなる小学校6年生における実践である。事前のアンケートでは、「歴史は、覚えることがいっぱい。」という、歴史学習に対するネガティブな意見が見られた。歴史を身近なものとして捉え、自ら追究したいという意欲を引き出すために、児童が生活する地域の遺跡を教材分析した。

本校は、古代豪族の古墳や律令国家期の「伊保郷印」の発見地、戦国期の城跡、第二次世界大戦時の特攻隊基地跡など歴史遺構に囲まれた地域である。

これらの中から教材を選択するために、「児童が多面的・多角的に歴史的価値を見出

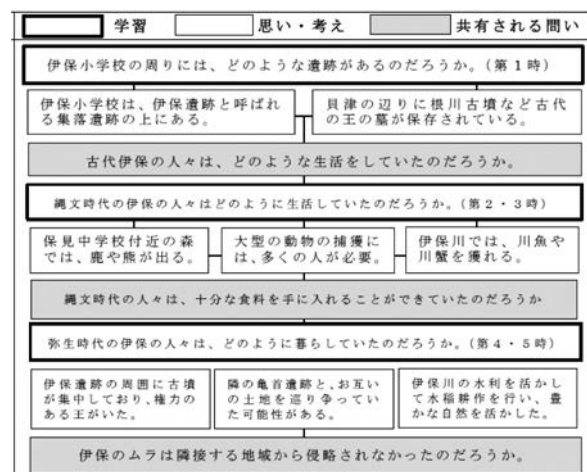
すことができること」を条件とした。

その中で、教材として選択したのが、伊保遺跡である。伊保遺跡は、縄文から古墳時代にかけての集落遺跡である。この遺跡は、出土物だけでなく、新修『豊田市史』や地域の歴史研究会による調査報告等の資料も豊富であり、児童が「調べたい」と追究意欲をもった際、それを支える土台が整っている。そして、縄文弥生期の狩猟採集生活を考える中では、児童が日常から目にする学校や家の周りの自然環境を関連付けていくこととなり、生活の中に、新たな発見を見出していくことができるようになる。その身近な発見が、主体性を高め、さらなる追究意欲を高める要素となると考えた。

(2) 思考がつながる単元構想

単元構想を行う際、大切にしたいのは、問題を見出す段階で抱かせる「単元を貫く課題」と追究過程や追究後に抱く「問い」である。

構想時に、学習内容とその学習過程で児童が抱く考え、そこから導き出される問いを単



【資料1】単元構想図（一部抜粋）

元構想図上に並べていく。【資料1】この単元構想を行うことで、児童生徒が追究する姿が具体化され、その追究を支える手立てが見えてくる。

本実践では、単元を貫く課題を設定するために、手立てとして「地域の遺跡分布図の読解」を行った。この活動によって、児童達は地域の歴史的景観に気付き、歴史を身近なものとして感じ、「どんな人が暮らしていたのだろう」と疑問を口にして単元を貫く課題『古代伊保の人々は、どのような暮らしをしていたのだろうか』が設定された。また、単元中盤で、他地域との交流関係に疑問（問い）を抱くだろうと予想し、事前に市の博物館へ連絡をして、当時の交流関係を示す資料の提供に協力を依頼し、児童の追究を支える手立ての準備を行った。

3 座席表を活用した児童の追究分析

(1) 追究を立ち止まり、振り返らせる

附属岡崎中学校の授業を参観する際には、座席表に前時までの追究を基にした生徒の考えが記されている。本実践においても、児童の追究を毎時間座席表に記録して分析した。

【資料2】一枚の座席表を用いて分析することは、個人追究の内容と、それに伴う変化が捉えることができるだけでなく、児童間の意見の関わり方（同調や対立・疑問など）を確認することができる。それらの分析は、主体的に追究するあまり、視野が狭窄する児童生徒の視野を広げることに有効である。

本実践において、児童Aは伊保地域が自然

⑨ 竪穴住居→木の柱だから腐りやすい。		る粘土も使える。農・魚・木・粘土がある場所が適している。	
⑩ 食べ物→鹿、魚、どんぐり、貝。縄文時代の道具や物は動物の骨でできていた。伊保は縄文人にとって暮らしやすい。		⑪ 縄文時代の人々は、伊保川で魚を獲っていたと思う。	
⑫ 縄文時代の人々は、山で狩りをして、畑で野菜をつくっていた。		⑬ 食料採集と土器作成に時間を当てていた。森などで、狩りをする場所は決まっていた。家は、竪穴住居。	
⑭ 伊保川近く→魚が獲れる		⑮ 何者とも関係なく、誰もが協力して生活をしていた。	

具体的な人々の生活する姿に迫ろうとする視点
 伊保地域の歴史的価値に迫ろうとする視点

【資料2】追究を記録した座席表（一部抜粋）

豊かであることから他地域と比較した伊保優位論を第3時から貫いていた。第4時の追究後に座席表で分析を行った際、人口の問題や他地域との交流関係の資料がない限り伊保の優位性については結論が出せないとする児童Bの考えに教師は注目した。第5時の話し合いの中で、児童Bに発言を促したところ、児童Aは、自身の考えを見直す必要があることに気付き、自分の考えを見つめ直すために必要な情報を手に入れるために博物館へ質問する内容を考えることができた。

(2) 分析から導く、共通の「問い」

座席表の分析は、追究過程における学級内で共有される問いの創出にも有効であった。追究をしていくと、追究の分野が多岐に広がっていく。先述した児童Aは食料問題に関心を持ち、児童Bは技術発展に関心をもっていた。学級集団として設定した単元を貫く課題を深めていくためには、個々の追究が共有されていくことが必要となる。そのために、どのような「問い」で話し合うかは大切な視点である。座席表を用いることで、教師は、個人が抱く疑問の共通点を見出すことができる。本実践では、そのひとつが「支配力」であった。教師は、このキーワードをもとに第5時の話し合いの中で、「君たちのいう支配力は何か」と問いかけた。この教師の問いかけによって、児童は個々の追究を根拠に話し合い、他者の意見と関連付けることで「伊保の地域は侵略されなかったのか」という新たな共通の問いを立てることができた。

4 おわりに

本稿では、「単元構想」と「追究分析」の視点から、附属校実践の公立校における活用について述べた。社会科としては、児童生徒が実際に動いて調査する取材活動なども取り上げたいところではあるが、紙幅の都合と筆者の実践不足であるため他日を期したい。豊かな追究を引き出す実践を今後も目指したい。